

■ はじめに

■ 熊野古道とは

～世界で2つ目の「道」の世界遺産～



ユネスコの世界遺産センターへ推薦書が提出されている「紀伊山地の霊場と参詣道」は、登録が認められれば平成16年6月頃に世界遺産になります。

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、「吉野・大峯」「熊野三山」「高野山」というそれぞれに性格の異なる3つの霊場と、その霊場を結ぶ「参詣道」で構成されています。

全世界で745件（平成15年6月現在）登録されている世界遺産のうち、これまでに「道」が対象になったのはわずかに1件。紀伊山地の参詣道が登録されれば、世界で2箇所目の世界遺産ということになり、その点において、極めて珍しく貴重な世界遺産であるといえます。

「参詣道」は3つの霊場へ詣でるいくつかの道があります。そのうちの「熊野参詣道」を俗に「熊野古道」と呼んでいます。伊勢神宮から熊野三山へ向かう「熊野参詣道伊勢路」は、東側からのコースとして、庶民に親しまれてきた道で、現在も16の峠道が昔のままに残っています。海岸線である「七里御浜」や、河川行路であった「熊野川」を含めた「熊野参詣道伊勢路」73.2キロメートルと、4箇所の史跡や名勝が、三重県内における世界遺産候補地です。

道は人が歩かなくなれば、消えてしまいます。また、往来が激しくなれば、拡張され、道沿いに人が住み、その姿は時とともに大きく変わっていくものです。ところが「熊野古道」は、古いものでは800年もの間、姿を変えることなく、その「文化的景観」を現代まで伝えつづけている奇跡の道です。

「熊野古道」が世界遺産に登録されるということは、この奇跡の道を今後も永遠に保全すると、全世界に約束したということに他なりません。

■ 熊野古道センターとは

～「熊野古道」と「人」を結ぶ『絆』～

世界的に珍しい「道」の遺産である「熊野古道」を保全し活用していくための中核となる施設が、「熊野古道センター」です。また、「紀伊山地の霊場と参詣道」における、東側の玄関口であることも、重要な役割の一つになります。

人が往来することで、物資はもちろん、文化、生活など、ありとあらゆるものを「道」は運び続けました。それが「道」のもつ本来の役割です。世界遺産となる「熊野古道」を、現在の姿のままに後世へ伝えるには、適度な活用を行いながら保全に努めることが大切です。歩くことで「熊野古道の本物」に触れ、さらには目には見えない歴史・文化・風土など「熊野古道の本質」を理解する。このことをサポートするのが、熊野古道センターが果たさなければならない中心的な機能です。

熊野古道センターは、「熊野古道」と「人」を結ぶ架け橋です。
そして、架け橋という構造物からさらに進んで『絆』でありたいと考えています。

熊野古道

- 世界遺産
- 道
- 文化的景観
(歴史・自然・民俗などの複合)

熊野古道センター

「熊野古道」と「人」を結ぶ『絆』

総合的にサポートする

- 守る人
- 訪れる人
- 研究する人

人

